

7月18日「神の選び」マタイ福音書8：5～13

今日の物語を読んだ時、私には疑問がありました。ローマ帝国の百人隊長がイエスのうわさを聞いて頼みに来ます。彼の僕が中風という思い病にかかってしまった。どうにか治してやってほしいと懇願します。イエスが「わたしが行って癒してあげよう」とわざわざ出向いてあげようと言ってくださっているのに、百人隊長は「ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。」とただ言葉だけで良い、来なくて良いですと断っているのです。皆さんだったらどうでしょうか？先日、「ダーツの旅」で所ジョージが多度津町にやって来ただけで、街を挙げて大歓迎、大騒ぎでした。私たちにとってはそれ以上のイエス様がわざわざ我が家に来てくださると言っているのです！大喜びして大歓迎するならいざ知らず、断るなんて失礼だと思いませんか？

少し調べてみました。私たちは、他人の家を訪ねることにそれほど違和感を抱きませんが、ユダヤ人たちは異邦人と交流することは、穢れを招くことだと忌み嫌いました。市場に行って帰ってきたならば、家に入る前にまず清めのために手を洗いました。異邦人の家を訪ねることなどありませんし、一緒に食事をするなんてもってのほかです。ガラテヤ書2章には異邦人にも伝道を開始した最初期の教会において、ペトロが普段は異邦人の改宗者とも食事をするのに、他のユダヤ人キリスト者がやってくると途端に彼らの目を気にして異邦人の改宗者たちと食事をしなくなることにパウロが怒っている記述があります。それほど当時のユダヤ人たちにとって異邦人との交流には難しい問題があったのです。恐らく、この百人隊長はユダヤ人たちが自分たちとの交流をどう思っているかを知っていて、「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。」と答えたのだと思います。異邦人である自分の家に招けば、イエスを困らせることになるかと分かっていたのでしょうか。だから言います。「ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。」彼もローマ軍の一員として、権威あるものの言葉の力を知っていたので、真に権威のあるイエスの言葉には、僕を癒す力があるはずだと信じたのです。イエスはその心遣いと、イエスへの信頼に心打たれ、僕を癒した

とのことですよ。

ところで、今日の福音書のイエスの言葉に私たちに向けて語られている部分があったことに気付かれたでしょうか？「11～12節 言うておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く。だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」この部分です。マタイ福音書は冒頭からユダヤ人だけではなく、異邦人のためにも、すべての民族の救いのためにイエスが来られた、ということ語ります。イエスの誕生の際に立ち会ったのは外国からやってきた占星術の学者たちでした。首都エルサレムに居た人たちは、救い主誕生の知らせを喜ぶどころか大変恐れます。救い主はユダヤ人たちから必ずしも歓迎されなかったのです。むしろ今日の物語のように異邦の方がはるかにイエスとの出会いを喜び、信仰を持って迎え入れます。百人隊長が示した謙虚さへのイエスの称賛の言葉です。「はっきり言うておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。」神の救いの御手はイスラエルの民だけでなく東の国や西の国、民族や国境を超えて世界中に広げられていく。しかし、真っ先に救いへと定められていたはずのイスラエルの民がイエスに見向きもしない・・・「御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」非常に辛辣な皮肉を込めて語られています。「御国の子」とは今では単にイスラエルの民だけを指す言葉ではありません。私たちキリスト者、またキリスト教会にも当てはまる言葉です。だとしたら、あまり認めたくはない事実ですが、泣きわめいて歯ぎしりするの、私たちという可能性もあるのです。

「選民」という言葉があります。広辞苑を引くとこうあります。「神から選ばれて他民族を導く使命を持つ民族。特にユダヤ民族にこの意識が強い。」ここにあるように、本来であれば、他の人たちを神さまの救いへと導く使命のことを言うのだらうと思います。ところが、私たちはどこかで勘違いしてしまいます。自分たちが偉いのだと。私がついついしてしまうこ

とですが、何か素晴らしい功績を残した人がいると、その人がクリスチャンであるかどうか、が気になる。そしてクリスチャンであれば、まるで自分のことのように誇らしくなります。逆に、何か不名誉なことがあると、（例えば先日、九州の方で他の教派の牧師が自殺教唆の角で逮捕された事件がありました）その人個人の責任にして、キリスト教の名誉が守られるように取り繕いたい気持ちになります。私たちの競争心、闘争心はとどまるどころを知りません。私たちは心の奥底で自分たちが特別だという、エリート意識、選民意識をもっています。普段は謙虚さを装っていてもそういう思いがどこかにあるのではないのでしょうか。

預言者ヨナの物語をご存知でしょうか。（ピノキオの基になったといわれていますが）預言者ヨナは神様からニネベの街に行って預言するようには言われるのですが、拒否して逃げ出します。神さまは逃げるヨナが乗った船を嵐に合わせ、大きな魚に飲み込ませて救い出し、もう一度ニネベへと遣わします。さて、ヨナがニネベの人たちに神様の怒りが下ることを告げると、なんと大都市ニネベの人たちはヨナをあざ笑うどころか皆、神の前に悔い改めて赦しを乞うようになります。イザヤやエレミヤなど預言者たちが神の民であるイスラエルの人たちに神様のことを伝えた時の反応とは大違いです！神さまはそれを見て、ニネベを滅ぼすことを辞めます。そこで初めてヨナがなぜ神様から逃げ出したのかわかります。ヨナの神様への訴えです。「わたしにはこうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐みの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。主よ、どうか今、わたしの命をとってください。生きているよりも死ぬ方がましです。」ヨナは神様から直接言葉が受け取れるくらいですから、よっぽど信仰深く、神の前に正しい人だったのでしょう。ですが、だからこそ赦せないのです。神さまが、異邦人のことを、信仰的な生活を送っていない人のことも私たちと同様に憐れまれることが。神の愛が私だけでなく世界中すべての人に及ぶことが。

今日、もう一か所選ばれていたローマの手紙の中でもパウロはこう言っています。「9：24 神はわたしたちを憐れみの器として、ユダヤ人からだけ

でなく、異邦人の中からも召し出してくださいました。」最初にもお伝えしましたが、初期教会で大きな信仰的な問題となったのは異邦人にも神様は救いの御手を差し伸べられているという事実だったのでしょうか。そんなことになればユダヤ人の優位性は崩れてしまいます。神の民のアイデンティティはどうなるのでしょうか？結局パウロが行き着いた答えはこれでした。それはただ神の憐みによると。神さまの愛は深い。あまりにも深くて広い。だから、神様はすべての人を憐み、滅びの器から貴い器へと変えられたのだと。すべての人を救うことにしたのだと。私たちはこの事実をまっすぐ受け止めたいと思います。私たち自身もまた、神の憐みにより、救われ、永遠の命を与えられています。だからこそ、私たちも人を愛し、人を赦し、互いに受け入れあって生きていくのです。カトリック信徒の方とこんな話をしたことがありました。「K司祭はさも立派な方に思える。でも実際接してみるとあまりに欠けが多くて、この人は司祭になれたのではない、司祭にしかなれなかったのだと思った・・・」自分も一緒だと思いました。何か優れていたから牧師になれたのではなく、牧師しか道がなかったのです。でもそれがある意味、それが神さまに選ばれるということなのです。

今日の物語は私たちにもう一度考えるように言われます。なぜあなたたちは選ばれたのか？なんのために神に召されたのか？この世で栄誉を受けるためではありません。この世で偉くなったり強くなったりするためではありません。神の憐れみの器として、私たちも他者を憐みながら、互いに受け入れあいながら生きていくのです。「ヨハネの福音書 15:16 **あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。**」